

ヒロイックエレジー  
共同体の英雄弔歌

— Ernest J. Gaines の *A Lesson Before Dying* —

伊 鹿 倉 誠

If we must die, let it not be like hogs  
Hunted and penned in an inglorious spot . . .  
If we must die, O let us nobly die,  
So that our precious blood may not be shed  
In vain. . . .

— Claude McKay

Look like every man that pick up the cross  
for the poor must end that way.

— *The Autobiography of Miss Jane Pittman*

### 1. 生と死を凝視する死刑囚

東京拘置所医務部の技官として犯罪学と拘禁心理を研究した経歴を持つ加賀乙彦（1929- ）は、『宣告』（1979年初版刊）の中で、生と死の極限で苦悶する死刑確定囚たちの拘禁ノイローゼの実態のうちに人間の条件を浮き彫りにする。全員が殺人犯ゼロ番囚たちは拘置所の二階に収容されているが、死刑宣告を受けた楠本他家雄は、いつ〈お迎え〉が来るか怯えている。女を崖から突き落とした砂田の暴力や一家四人を殺した大田の発作、そして他家雄の奇妙な墜落感など、拘置所の医官で若い精神科医の近本は丹念に見て廻る——。作者は、完全な管理体制下にある刑務所を現代社会の縮図と見なす。絶え間なく監視され、命令され、自由を制限された閉塞状況で、人間らしく生きるにはどうしたらいいかを問い掛けている。

さて、『宣告』のモデルとなる死刑囚と、作家が書簡を往復し始めるのは、北フランスの精神病院を舞台に精神科医の病理を問う長篇小説『フランドルの冬』を上梓した1967年8月であった。1953年10月に強盗殺人犯として逮捕されたAは既に14年近く獄中にあり、1963年1月最高裁判決で死刑が確定してから東京拘置所でいつ処刑されるか判らぬ日々を送っていた。それから2年4ヵ月後、絞首刑に処されるAが母に宛てた最後の手紙（1969年12月8日付）が、『ある死刑囚との対話』（1990年刊）に収録されている。以下、四分の一ほどを抜

粹する。

夜明け。

まだ外はまっくらですが、おかあさんにもっとたくさん書いてあげたくて、起きました。よく寝たような、うつらうつらのなかに過ぎてしまったような、へんな気分です。おかあさんは？ たぶん、ぼくのためにたくさん祈ってくださったことでしょう。ありがとう。もうすぐ、きょうの午前中にはいなくなってしまう、そう思って、今ごろまた泣いているの？ ほんとうにごめんなさい。おかあさんの写真は笑っているのに。

きょうも、さして寒くない。髪とツメのこと、よく頼んでみます。(略)

さあ、おかあさん、七時です。あと一時間で出立する由なので、そろそろペンをおかねばなりません。

ぼくの大好きなおかあさん、優しいおかあさん、いいおかあさん、愛に満ちた、ほんとにほんとにすばらしいおかあさん、世界一のおかあさん、さようなら！

でもまたすぐに会いましょうね。だからあまり泣かぬように。

さようなら、百万べんも、さようなら！

(髪のとツメを同封します。コレだけでよかった?) A (234-35)

大学卒業後、証券会社に勤めたAは、1953年7月金融業兼証券外交員を、共犯二人と共に殺害、現金40万円を奪う。主犯として指名手配され10月に逃走先の京都で逮捕され、東京まで護送される列車内で罪の意識などないとうそぶき、新聞記者らを啞然とさせた。敗戦で受けた心の傷が、「いっばしの軍国少年に育てあげた大人たちへの不信」(4)として癒えずに残っていたという。だが、獄中信仰に目覚め、1955年7月洗礼を受ける。引用には、1時間後に処刑される死刑囚が、不信の徒から神の愛に目覚めた信仰の人として、迫り来る恐怖を超越した観がある。

以下に引用するのは、1948年の米国深南部を舞台にするアーネスト・J・ゲインズ (Ernest J. Gaines, 1933-) の長篇第6作 *A Lesson Before Dying* (1993年初版刊, 以下 *Lesson*) の29章 “Jefferson’s Diary” の一節である。21歳の黒人青年は不幸な家庭環境と公教育の欠如から犯罪に巻き込まれ、第一級強盗殺人罪で有罪評決を受ける。処刑の日の未明に綴られた断章は、『宣告』のモデル同様に読者の胸に迫る。

its late an i dont know what time it is but i kno its late an i jus went to  
the tolet an i jus wash my face

day breakin

sun comin up

the bird in the tre soun like a blu bird

sky blu blu mr wigin

good by mr wigin tell them im strong tell them im a man good by mr wigin  
im gon ax paul if he can bring you this

sincely jefferson (234)

もうまよなか なんじかわからんけどもうおそい ようをたしてかおをあらう／よがあけてくる／たいようがのぼる／とりがきにとまりないてる  
ブルーバードみたい／そらがあおい すっごくあおいよウィギンせんせ／  
ごきげんようウィギンせんせ おれががんばるってみんなにいうてください  
おれにんげんだってみんなにつたえてください さようならウィギンせん  
せ これをせんせにわたしてくれるようポールにたのんできます／こころ  
をこめ ジェファソンより

『宣告』の楠本他家雄は、強盗殺人を犯し逃走の果てに逮捕され、死刑判決を受ける。獄中で洗礼を受けた死刑囚は、生と死を見詰め苦悩する信仰の人として罪を悔い厳罰に処される。アフリカ系アメリカ文学に目を向けると、まず頭に浮かぶ死刑囚は、リチャード・ライト (Richard Wright, 1908-60) が1940年に発表した長篇小説 *Native Son* の **Bigger Thomas** であろうか。ビガーは、泥酔した **Mary Dalton** を寝室に運んだところで盲目の母親と遭遇し、声を出さぬよう枕を口に押し付け白人娘を窒息させてしまう。混乱するビガーは、地下焼却炉で証拠隠滅を謀る。何も知らぬアルコール依存症の情婦 **Bessie** と闇雲に逃走するが、途中足手まといに感じ煉瓦で殴殺する。逮捕され裁判を受ける20歳の黒人青年は、動機なき殺人として口頭弁論する白人弁護士 **Max** に口を開かない。殺人と裁判を通じて皮肉にも自分が人間だと気付くビガーであるが、結局、暴力による自由と引き換えに何も語らず電気椅子で処刑される。Lesson の場合、*Native Son* や『宣告』と違い、死刑判決に服する冤罪被害者が主人公である。しかしながら、作者は冤罪を晴らす筋書きを用意しない。Lesson は、

生と死を凝視する死刑囚という文学モチーフに、気丈な女たちを中心とする共同体が黒人英雄を生み出す物語である。雄豚から人間という変身譚において上に引用した「ジェファソンの日記」は、自由と人間性の回復を記録する奴隷体験記と同質の役割を果たす。以上の観点から小論では、共同体の英雄が誕生する過程について考察する。そして、物語の結末にみられる、黒人文化を継承する際に生じる手続き上の綻びについて若干の論考を加えてみたい。

## 2. 雄豚から英雄へ

公衆電話もない村落から20km余り離れたところにルイジアナ州 St. Raphael の郡都 Bayonne がある。セメント工場と製材所と豚肉処理場を主要産業とする、白人3,500と黒人2,500の田舎町である。事件は White Rabbit Bar and Lounge という食糧雑貨店で起きた。酒の掛け売りを断乎拒む白人店主 Alcee Gropé と酒臭い息を吐きながら店のカウンターに入る黒人 Bear、両者撃ち合いになり相棒 Brorher 共々銃弾に倒れてしまう。その場に偶然居合わせたジェファソンは、逃走することもせず、警察を呼ぼうにも電話の掛け方が判らない。ウイスキーをがぶ飲みした後でレジの売上金を盗むことが頭をよぎり、その弁解の余地がない姿を、銃声を聞き付けた白人住民に目撃される——。〈黒ん坊強盗三人組〉による白人殺害事件を担当する検事と公選弁護人は無論白人である。そして陪審員12名全員が白人男性で構成される刑事裁判が郡庁舎内の法廷で開かれる。南北戦争で奴隷が解放され、公民権運動を経て1970年代に差別法の撤廃が進むまで、アフリカ系アメリカ人は、奴隷時代とは異なる種類の苦難に遭遇した。1950年代半ばの人種差別撤廃運動が始まる前の1948年から翌年にかけての深南部という舞台を考慮すれば、無罪評決は期待できない。<sup>1</sup> こうした時代設定と物語構成は、ストウ夫人 (Harriet Beecher Stowe, 1811-96) が奴隷制廃止論の青写真のひとつとして提示した、キリスト教的不屈の精神による非暴力抵抗を想起させる。不条理な黒人差別の苦悩をたった一人で引き受けるジェファソンは、人間の罪を背負い磔刑に処される黒いキリストなのだろうか。だが、黒人教誨師 Mose Ambrose が注ぎ込む神の言葉は、死刑囚の心の琴線に触れない。では、冤罪を晴らす手立ても講じられず、あのおぞましい電気椅子に縛り付けられるジェファソンは、Uncle Tom 同様に弾圧行為に対する能動的抵抗という本質的アメリカ経験の機会を奪われているのだろうか。

陪審員席に向かい弁護人は、ジェファソンを雄豚と連呼する。人間ではない

生きものに強盗計画は無理な相談で、<sup>ホッグ</sup>雄豚を電気椅子で黒焦げに焼いても何にもならない。そもそも善悪の区別も付かぬ21歳の<sup>ボヘイ</sup>未熟者を成人に達しているとは見なせない。〈窮鼠猫を囓む〉という予期せぬ反撃は、アフリカの奥深い<sup>ジャングル</sup>密林に棲息する原種から形質発現したものであると、以下の長広舌を振るう。

“Gentlemen of the jury, look at this—this—this boy. I almost said man, but I can’t say man. Oh, sure, he has reached the age of twenty-one, when we, civilized men, consider the male species has reached manhood, but would you call this—this—this a man? No, not I. I would call it a boy and a fool. A fool is not aware of right and wrong. A fool does what others tell him to do. A fool got into that automobile. A man with a modicum of intelligence would have seen that those racketeers meant no good. But not a fool. A fool got into that automobile. A fool rode to the grocery store. A fool stood by and watched this happen, not having the sense to run. [...] I ask you, I implore, look carefully—do you see a man sitting here? Look at the shape of this skull, this face as flat as the palm of my hand—look deeply into those eyes. Do you see a modicum of intelligence? Do you see anyone here who could plan a murder, a robbery, can plan—can plan—can plan anything? A cornered animal to strike quickly out of fear, a trait inherited from his ancestors in the deepest jungle of blackest Africa—yes, yes, that he can do—but to plan? To plan, gentlemen of the jury? No, gentlemen, this skull here holds no plans. What you see here is a thing that acts on command. A thing to hold the handle of a plow, a thing to load your bales of cotton, a thing to dig your ditches, to chop your wood, to pull your corn. That is what you see here, but you do not see anything capable of planning a robbery or a murder...” (7-8)

人間から命令されれば行動を起こす「生きもの」(a thing)、すなわち農地を耕し、綿花の束を積み上げ、溝掘りや材木切りに精を出し、トウモロコシの皮をむしることはできる——だが、物事を計画的に運ぶ「僅かばかりの知能」も持ち合わせてはいない。Uncle Tom’s Cabin; or, Life among the Lowly (1852年初版刊)  
サブタイトルの副題は元々“The Man Who Was a Thing”であったという。さらに150年前200名以上の奴隷を所有する富裕地主であったトマス・ジェファソン (Thomas Jefferson, 1743-1826) が Notes on the State of Virginia (1785年私家版) の中で説き起こす、黒い皮膚と知力の欠落が奴隷解放の大きな障害であるという黒人劣性理論に、上に引用した口頭弁論の源流を辿ることもできよう。「黒人は(略)身体と頭脳のいずれの資質においても白人に劣る」(Notes 143) という白人優

位思想を援用する弁護人は、被告人の無実を立証するために、黒人の人間性を一つずつ剥奪してゆく。ジェファソンは、同じ姓を名乗る建国の父のひとりが20世紀半ばに所有する奴隷であるかのようだ。白人陪審による不当評決のみならず、弁護側が唯一提供する原理的説明が、〈人間〉の範疇から黒人被告を除外するという点に、訴訟手続きの欠陥が明らかになる。死刑制度は、罪人が自力更正する道を閉ざす。したがって、死をもって罪を贖うしかない『宣告』の楠本他家雄は、社会秩序を維持するために人間が定めた法規に照らし処罰される過程で人間性を剥奪されていく——「おれは人間ではない。おれは人間であることを許されてはいない。法律規則という人間の作った文章が、おれから人間の属性の一つ一つ剥ぎとっていった。刑法、刑事訴訟法、監獄法、数多くの訓令、通牒、通達、判例が、眼に見えぬメスとなっておれから人間の属性を削ぎ落としていった」（上巻 89）。一方、南北戦争時の北軍総司令官（Ulysses S. Grant, 1822-85）の名を付けられた教師 Grant Wiggins は、畜殺に等しい最期からジェファソンを人間として解放するため、奴隷に逆戻りする屈辱を味わうことになる（Thompson 286）。

さて、陪審は有罪を評決し、三日後には判事による死刑が申し渡された。1948年8月のことである。70歳半ばの名付け親 Miss Emma Glenn は「命乞いはしない。済んだことさ。ただ、あの子に人間らしく死んで（die like a man）もらいたい」（22）と名付け子を教えたグラントを頼みの綱に指名する。ミス・エマは、有罪評決への不服申し立てでなく、白人による黒人の人間性剥奪に猛反撥する。こうして *Lesson* は、冤罪を晴らす物語の展開予想を裏切り、雄豚から人間への変身譚に移行する。

“The public defender, trying to get him off, called him a dumb animal,” I told her. “He said it would be like tying a hog down into that chair and executing him—an animal that didn’t know what any of it was all about. The jury, twelve white men good and true, still sentenced him to death. Now his godmother wants me to visit him and make him know—prove to these white men—that he’s not a hog, that he’s a man. I’m supposed to make him a man. Who am I? God?” (31)

善悪の区別も計画を立てる知能も持ち得ぬ雄豚と貶められ自暴自棄になった教え子を、処刑前に人間にする神にはなれない、と教師は一度ならずも名付け親の頼みを断る。この黒人共同体から距離を置く語り手は、農場付きの教会の教

壇に立ち続けても黒人部落を救えないと諦めている。深南部でやれる教育とは、15から20家族の6歳から13歳までの子供たちに「読み書き<sup>クォーター</sup>算数<sup>そろばん</sup>」を教えるだけなのだ。農閑期で家業を手伝わなくて済む10月末から4月中旬まで子供たちに開放される薄暗い礼拝堂には、信者席があるだけで机と呼べるものはない（写真参照）。300年の奴隷時代に幾度となく塗り固められた「一面の無知を拭い去り、剥ぎ取り、擦り取るには5ヵ月半では到底及ばない」（64）。年一度学校を訪問する郡教育長 Dr. Joseph Morgan は、奴隷競売に参加する白人のように子供たちの口を大きく開けさせ虫歯がないか覗き込む。30分の短い視察を終えた教育長が発する「生徒たちは立派に育ってる、実に素晴らしい作柄だ、ヒギンズ」（“You have an excellent crop of students, an excellent crop, Higgins [sic]” 56）という毎度同じ褒め言葉から、黒人教育とは名目だけで実体がないことが判る。



ジョージア州農村部の人種隔離学校（1941年頃）Morrison 15

だから、こんな希望のない村を抜け出してやろうと教師はいつも考えている。

ここで、長篇第3作 *The Autobiography of Miss Jane Pittman* (1971年初版刊) を取り上げ、ゲインズが考える男らしさについて理解を深めておきたい。<sup>2</sup> 南北戦争が連邦脱退軍の敗退で終結し、当時11-12歳の Jane は北部へ旅立つが、南部敗残兵に襲われ仲間の多くが虐殺される。孤児 Ned を引き取って養育するが、17-18歳になるネッドは、白人至上秘密結社に命を狙われ、北部に逃亡する。それから20年後に妻子を連れ帰郷したネッドは1年に3ヵ月しか学校に通えぬ村落の子供のために学校建設に着手する。殺し屋が密かに雇われたと告げる母代わりのジェーンに「学校を必ず建ててみせますよ。殺されるまで教えるつもりです」(“I will build my school. I will teach till they kill me” 133) とネッドは答える。志半ばで凶弾に倒れる教師は子どもたちに何を教えようとしたのか。それは、虐げられて何もかもどうでもいいと自暴自棄に陥る〈黒ん坊〉ではなく、人を思い遣り、一生懸命努力し、今日一日をより良くする気骨のある「アメリカ黒人」(138) を育てようとしたのだ。

さて、ジェファソンは無実の罪で死刑宣告を受け、雄豚として処分されるはずであった。しかし、育ての親ミス・エマがそれを許さない。処刑される悲運は今となっては諦めるしかないが、せめて一端の人間として最後の一步を踏み出してほしいと願う。ミス・エマとグラントを育てた伯母 Tante Lou は、不動の肉体と不屈の精神を持ち、過酷な運命にひたすら耐えてきた。大きな岩のようなふたりは、人間としての威厳を白人に示すこと、300年にわたる奴隷時代から恋人や妻や娘を守ることすらできない男たちが繰り返してきた「悪循環」(“this vicious circle” 167) を断ち切ることを要求する。教師である限り、人種隔離政策や貧困に喘ぐ子供たちに教える〈責任〉があると主張する混血教師で夫と別居中の Vivian Baptiste に、“I’m tired of feeling committed” (29) とグラントは愚痴る。黒人の男は、「いかに生きてゆくか」(31) 常に神経を擦り減らし押し潰されそうなのだ——。だからこそ、*Lesson* における女たちの存在意義は大きい。グラントがジェファソンとの面会を投げ出したいときも、抑圧的な南部から一緒に逃げ出したいと切り出したときも、女たちは男の弱音を許さない。ヴィヴィアンの美しい容貌は、無実だが黒人という理由で殺される不条理で醜い現実と対照的であるが、恋人が深南部の実状から目を逸らすことは認めない。もし人種隔離社会の罠に落ちた教え子を置き去りにして自分の幸福と利益を追い求めれば、一生後悔し続けることになる。南部から逃げ出す黒人は、



人間の尊厳を持たずに処分される死刑囚と同じ哀れな末路を辿るしかない。絶えず男を監視する女たちは、このように〈看守〉の役割を担っている。

村を出る10年前は農場主 Henri Pichot の屋敷で勝手口から出入りしたグラントだが、白人と話すときの言葉遣いや目の遣り場など、大学卒業6年目の現在では堪え難い。学校運営費は殆ど交付されず、チョークが尽きれば自腹を切るしかない。劣悪な教育環境の中、グラントは自分の非力を恥じる。「ちゃんと勉強しないとジェファソンみたいになるぞ」(39) という心ない言葉に死刑囚の従妹 Estelle が泣き出すが、教師は同情する素振りは見せない。

白人たちを前に〈教師〉と〈黒んぼ〉を演じ分けるグラントに、死刑囚との面会許可が下りる。ベイヨンの郡庁舎にある保安官事務所を訪ねるグラントは、屈辱的な所持品検査に耐え教え子と再会する。「トウモロコシを持ってきたか(略)雄豚の餌だからな」(82) と、死刑囚は「苦痛で世を拗ねたようにやにや笑い」を浮かべる。「雄豚じゃなくて人間なんだぞ」と諷める教師に、「おいらはクリスマスに屠殺するために肥やされる雄豚さ」(83) とジェファソンは答え、差し入れの紙袋から手を使わず食い散らす。ジェファソンが豚に退行するのは、非人道的な処遇に順応する行為と解釈できる (Lowe 149)。例えば、フレデリック・ダグラス (Frederick Douglass, 1818-95) は、奴隷調教師 Edward Covey に人間から獣に一変させられたことを、1845年の自伝の中で次のように回想している。

Mr. Covey succeeded in breaking me. I was broken in body, soul, and spirit. My natural elasticity was crushed, my intellect languished, the disposition to read departed, the cheerful spark that lingered about my eye died; the dark night of slavery closed in upon me; and behold a man transformed into a brute! (94-95)

ミスター・カヴィに縛り上げられ生命の危険が迫るダグラスは、攻勢に転じ二時間余り激しく揉み合い、ついに調教を断念させる。生死を賭けた一騎打ちを、ダグラスは自由への希望と人間性と自己信頼を呼び戻す奴隷人生の転換点と見なす——“You have seen how a man was made a slave; you shall see how a slave was made a man” (97)。この引用の〈奴隷〉を〈雄豚〉に置き換えれば、そのまま Lesson にみられる語りの結構となるであろう。

さて、面会を終えたグラントは、馴染みの黒人酒場 Rainbow Club に足を向

ける。薄暗いカウンターに陣取る先客ふたりは、シーズン二年目を終えたジャッキー・ロビンソン (Jackie Robinson, 1919-72) の話で盛り上がっている。黒人初の大リーガーの大活躍を身振り手振りで語り合う年配客たち——。10年前のこと、ドイツ人のシュメリング (Max Schmeling, 1905-2005) からヘビー級選手権を防衛したジョー・ルイス (Joe Louis, 1914-81) の実況中継を夢中で聴いた記憶が甦る。1938年6月22日に観客7万人で埋まるヤンキー・スタジアムで行われた<sup>リターンマッチ</sup>雪辱戦である。何週間も浮かれ騒ぐ村人と「たったひとりの英雄」 (“the only hero we knew” 88) が立てた偉勲に胸のすく思いを当時17歳のグラントは共有した。大人が話すのはいつも「われらが英雄たちの話題で、死者の話題であり、その死者たちがどれほど偉大だったか」(90)である。たとえどれほど不当な決定であろうとも、黒人が白人に異議を唱えれば、共同体を危険に晒す可能性が生じる。だから、判決に不服を申し立てる<sup>アペール</sup>禁忌は破られない。1940年代は、黒人の偶像崇拜の対象が<sup>フォークヒーロー</sup>民衆英雄からスポーツ選手や映画スターに移行する時代であったという。だが Beavers が指摘するように、<sup>パブリック・スフィア</sup>衆人環視の中で共同体の英雄を見出す方便は、皮肉なことに、黒人の<sup>マスキュリニティ</sup>男らしさが見世物小屋で最も効果的に実証されるという空説に荷担する (“Prodigal” 142-43)。

### 3. Jefferson’s Diary —<sup>ノート</sup>覚書から<sup>ゴスペル</sup>福音書へ

11-12歳で受洗した神の子が信仰を捨てる事態に「神に召される寸前の者にとって、篤信以外に何の大事があろうか」(101)と牧師は嘆く。だが、余命幾ばくもない死刑囚は、「神を信じなさい。さすれば道が開かれよう」と説き勧める教誨師に、剥き出しの敵意を見せる。一方グラントは、電気椅子に歩いてゆく自分の姿を一度ならずも夢見たことを、独房に向かう途中で保安官代理のポールに洩らす。鉄格子の高窓越しに鈴懸木をじっと見上げるジェファソンは、髪を短く刈り込んでいる。「人はいつか死ぬ運命にあるが、自分を愛し犠牲となってくれた人を傷付けないよう日々努力すべきだ」と教師は話し掛ける。すると、「あんたが来ると苛つく」(129)と教え子の声は怒気を帯びる。

He was full of anger—and who could blame him?—but he was no fool. He needed me, and he wanted me here, if only to insult me. “Her old pussy ain’t no good,” he said. My heart suddenly started pumping too fast. I made a fist of my right hand. If he had been standing, I would have hit him. If he had been anyplace else, I would have made him get up and I would have

hit him. I would have hit any other man for saying that. But I recognized his grin for what it was—the expression of the most heartrending pain I had ever seen on anyone’s face. (130)

侮辱するためでも自分が必要とされていると教師は気付く。相手が浮かべる卑猥な薄笑いは、胸が張り裂けそうな苦痛の表れなのだ。グラントは、固めた拳を緩め、「自分を面会に寄越すのは、きみの身を案じるヴィヴィアンだ」(130)と伝える。

さて、<sup>スレイヴ・ナラティブ</sup>奴隷体験記を起源とするアフリカ系アメリカ文学が、小説様式を取り込む契機となるのは、「生まれつきのキリスト教徒」という黒人像を1850年代の奴隷制廃止運動に結実させた *Uncle Tom’s Cabin* であった。不完全な人間性が取り除かれた「道徳的奇跡」(240)と称揚されるアンクル・トムと人格を根こぎにされた<sup>ホッグ</sup>雄豚ジェファソンは、対照的な黒人造型ながら、<sup>メタファ</sup>奴隷捕囚という暗喩では類似する。逃亡を謀ったり自由に向かって前進するのを原則的に拒否するトムは、家族との別離を甘受し、地上で苦悶し天上で勝利するキリスト者の理想像である。キリストの教えに殉ずるトムに対して、無実の黒人死刑囚は、勇敢な死に際を見せ<sup>きつ</sup>て奴隷時代の傷が癒えぬ黒人共同体を救済する。グラントは、*Uncle Tom’s Cabin* の混血奴隷 <sup>ムラート</sup>George Harris の流れを汲む<sup>キャラクター</sup>登場人物と考えてもよいだろう。神の存在について懐疑を抱きながら建国の父の自由独立を志向するジョージは、逃亡の末再会した<sup>クアドルーン</sup>四分の一混血妻 Eliza の説得でキリスト教に帰依し、後年フランス経由で宣教師としてアフリカに派遣される。米国南部から脱出するという点で、ふたりは共通する。だが、死刑囚との深交を通して、生まれ故郷に留まることを決めるグラントには、ストウのキリスト教道徳至上世界には描かれなかった共同体との繋がりが垣間見える。<sup>ゴッドマザー</sup>名付け親エマは、気が進まぬグラントに「<sup>パードン</sup>重荷だと思ふんなら面会に行かなくていい」(78)と繰り返すが、これは一度は故郷を捨てた<sup>プロディガル・サン</sup>放蕩息子の男らしさを危ぶむ<sup>マンフッド</sup>共同体の声なのである。

判決から7ヵ月余り経つ2月末、アンブローズ師と共にピショール邸に呼び出されたグラントは、死刑が4月8日(キリスト受難と同じ金曜日の正午から午後3時)に執行されることを知らされる。広さ6×10フィート(約5.4㎡)の独居房には金属製の寝棚と便器と洗面器と食器が備えられ、高窓の鉄格子から木の葉が覗いている。朝10時と夕方4時に食事が与えられ、週一時間だけ独房

を出て談話室<sup>デイルーム</sup>で過ごすことが許されている。シャワーは週一度と決められ、散髪は別の囚人が担当する——名付け子<sup>ゴッドサン</sup>の好物ガンボシチューをミス・エマが差し入れるが、手錠と足枷に繋がれたジェファソンは手を付けない。談話室<sup>デイルーム</sup>を一緒に歩きながら「他人のために何かやってあげる者が英雄なんだ。他の人間がしないことやできないことをする人間だ。他の人間とは違う。他の人間の上に立つ人間だ。(略)地球上に住む者は流木と同じで、何か違うものになれるはずなんだ」(191-92)と教師は話す。嘗て奴隷を五分の三の人間と規定した白人が、今なお非科学的な人種優劣を堅く信じていること、黒人が二本の足で立ち続けて、ものを考え、同じ人間性が備わると実証することが、生殺与奪の権を握る白人が言う嘘の皮を剥ぐことになると説く(192)。辛そうに赤く泣き腫らした目で見詰める教え子を前に、教師は「卑しい身分ながら、自分もまだ全体の一部なのだ」(“lowly as I am, I am still part of the whole” 194)と感極まって涙する。

「きみの友だちになりたいんだ」と言うグラントは、ノートと鉛筆を用意するから素直な気持ちを書き留め、それを話の種にしようと提案する(185)。後日、ノートの四分の三ページほどに、不格好に大きな文字で、大文字も句読点<sup>キャピタル</sup>もなく、恐ろしい夢にうなされ眠れないこと、雄豚と呼ぶのなら頭をいつそ撃ち抜いてほしい、という稚拙だが嘘偽りのない気持ちが綴られている。「天国に行けるだろうか」(221)という真摯な問いに無神論者は答えられない。壁付き寝台から立ち上がるジェファソンは、高い鉄窓の向こうに見える鈴懸木に吹く新芽を見付け、「ウィギンズ先生、おいら十字架を引き受けるよ、先生のも、ばあさん<sup>ジャナ</sup>のも、おいらの分も」(224)と言う。赤ん坊のとき親に棄てられ、6歳<sup>ウォーターボーイ</sup>のとき給水坊主となり手酷く働かされた。それ以来、綿花を詰め込んだ麻袋を引き摺り、砂糖きびを刈り取ってきた。でも一度も自分を「人間」(“youman [sic]”)と考えたことはない<sup>ヒューマン</sup>と静かに語る。

I raised my head, and I saw him standing there under the window, big and tall, and not stooped as he had been in chains. “I’m go’n do my best, Mr. Wiggins. That’s all I can promise. My best.” “You’re more a man than I am, Jefferson.” “Cause I’m go’n die soon? That make me a man, Mr. Wiggins?” “My eyes were closed before this moment, Jefferson. My eyes have been closed all my life. Yes, we all need you. Every last one of us.” (225)

手錠や足枷を付けた前屈み姿勢と異なり、狭い独房で堂々と立つジェファソン

は、「間もなく命が終わるから人間になるのか」とグラントに訊く。奴隷時代から女子供を守れなかった男は、南部に残って社会の落伍者となるか、南部からこそこそ逃げ出すしかない。現状を打破しようにも背負う荷が重過ぎて正気を失わず生き抜くことは困難を極める。立派な最期を遂げるよう最善を尽くす死刑囚だけが、失われた人間性としての尊厳を取り戻す、共同体の英雄となるのだ。

郡庁舎の地階で巡回電気椅子による死刑が執行される日、昼食を早めに家で済ませ正午前に教室に戻るよう、教師は生徒に命じる。4月の抜けるような青い空、腰まで生長した砂糖きび——、だが畑に出る村人は誰ひとりいない。村落は息を潜め、その想像を絶する恐怖と苦痛が終わるとき、前人未到の偉業を成し遂げる人間、すなわち「共同体の人間の尊厳を裏付ける（略）新しい神」（Auger 80）の誕生を待つ。子供たちが3ヵ月前演じたキリスト降誕劇で東方三博士が下す神託（“The lowest is the highest in His Eye” 149）が、ジェファソンの死に際（<sup>きわ</sup>）に逆説的に実体化する。その時立てられたクリスマスツリーの下には「赤い紙で包装され緑のリボンをかけられ赤と緑の蝶結びが付いた贈り物」（147）、箱の中には子供たちが胡桃の実を拾い集めて稼いだ小銭で死刑囚のために求めた毛糸のセーターと靴下があった。

I know now that that old man is much braver than I. I am not with you at this moment because—because I would not have been able to stand. I would not have been able to walk with you those last few steps. I would have embarrassed you. But the old man will not. He will be strong. He is going to use *their* God to give him strength. You just watch, Jefferson. You just watch. He is brave, braver than I, braver than any of them—except you, I hope. My faith is in you, Jefferson. (249)

グラントは、村落を代表して刑執行に立ち会うアンブローズ師に敬意を払う。だが、刑場に付き添う教誨師よりも、二本の足で電気椅子に向かう名付け子の方がはるかに勇敢なのだ。その想いをグラントは「ジェファソン、私はきみを信じるよ」と信仰告白の形で吐露する。「いかに教育があろうと、過ちゆえに神を知らぬなら（略）その者もまた無知という寒く暗い独居房に閉じ込められている」（146）と牧師から苦言を呈された教師は、自身の信仰対象を得て魂の冷たい獄舎から解放される。ピショール邸を囲む木柵の角に立つ胡桃の木陰に腰を下ろすグラントは、裁判所からの連絡を待つ。南北戦争の頃か

ら、大事な知らせは最初に屋敷に届くからだ。無辜の黒人を殺す白人があがめる神を信じることなどグラントにはできない。だが、ミス・エマヤルウおばさんを始め、村人たちは、たとえ肉体が自由にならずとも、精神の自由のために神に祈り続けるだろう。「痛みを和らげるため通夜や葬儀で嘘を付く」(218)と牧師は開き直るが、グラントは白人の神を引き合いに白人のせいで殺される<sup>ゴッドサン</sup>神の子に嘘は言えない。だから、自由な精神も得られぬ〈奴隷〉に過ぎないと自嘲する——“Yes, they must believe, they must believe. Because I know what it means to be a slave. I am a slave” (251)。グラントは、<sup>チャーチ</sup>神の家で教鞭を執りながら教えることに厭気が差す「自己が置かれた環境の囚人」(“Writing” 774)なのである。

グラントが教会の敷地に入りかけたとき、若い白人看守ポールが、預かったノートを届けに車でやって来る。頭巾が被せられた後は、顔を上げられず刑場の床をずっと見詰めていたこと、高圧電流が流れるぞっとするような物音を二度聞いたことなどを静かに報告する。白人刑務官と立ち話をした後、グラントは子どもたちが待つ教会に戻る。こうして起立する生徒を前に教師が涙を流す場面で *Lesson* は幕となる。

“I don’t know what you’re going to say when you go back in there. But tell them he was the bravest man in that room today. I’m a witness, Grant Wiggins. Tell them so.” “Maybe one day you will come back and tell them so.” “It would be an honor.” I turned from him and went into the church. Irene Cole told the class to rise, with their shoulders back. I went up to the desk and turned to face them. I was crying. (256)

「ジェファソンの日記」は、何でも書き留めるようにとグラントが勧めた経緯もあり、教師と教え子の間に交わされる、呼び掛けと応答である。黒人霊歌<sup>コール・アンド・レスポンス</sup>な<sup>ブラック・スピリチュアル</sup>の歌唱法に多用される掛け合い形式の日記は、自我と言語能力が結合する<sup>スレイヴ・ナラティブ</sup>奴隷体験記の系譜に位置付けられる。綴り間違いだらけで句読点が欠落した稚拙な文章は、規則や形式より内容と実質を重視する小説技巧が凝らされている。<sup>ノート</sup>〈覚書〉には、愛し育ててくれた<sup>ナナサン</sup>ばあさんのため罪のゆるしを願いたい、白人ばかりをひいきにする神さまに罰当たりな口をきくあほうが、刑場の向こうにある天国に行けるだろうか／人を好きだなんて言わなかったが、それは生まれて一度も誰からもそう言われたことがなかったから／学校の子だけじゃなく、村のみんなが会いに来てくれてとても嬉しかったこと／いとこのエステル

がキスしてくれたとき、薄らとんかちの Bok が大事なビー玉をくれたとき、声を上げ泣いたこと／笑顔がすてきな先生の<sup>い</sup>好い人にキスされた喜びなどが、ひとかどの人間と思わせてくれた深い感謝と一緒に綴られている――。

ダグラスは、読み書き能力の中に奴隷状態から自由への道を見出すが、「口に出さぬため消え去る」思考にいわば「舌」(66)を提供する読み書き能力は、生涯奴隷という苦悶を増幅する負の機能を併せ持つと気付く。だから、仲間の奴隷のように何も考えぬ<sup>ビースト</sup>獣に退行したいと願う――“In moments of agony, I envied my fellow-slaves for their stupidity. I have often wished myself a beast. I preferred the condition of the meanest reptile to my own. Any thing, no matter what, to get rid of thinking!”(67)。いわば20世紀半ばの奴隷捕囚であるジェファソンは、死罪に処される我が身の行く末に四六時中思いを巡らす。換言すれば、人間としてものを考える責め苦から逃げたりしない。処刑される自分に愛の手を差し伸べてくれた人たちのために十字架を背負うとは、人間として死ぬ直前まで苦しみ抜くことなのだ。このような日記を書き遺すジェファソンは、結果的に新しい自分自身を心に描くことが可能になる。そして、一時的にせよ、黒人共同体が継承するであろう文化の<sup>キーストーン</sup>楔石となる (Lowe 159)。

最終章における人種相互理解の可能性は、ユダヤ教徒としてキリスト教徒を迫害した後、半生を福音伝道に捧げた使徒パウロの名を与えられた白人看守に託されている。また、グラントとヴィヴィアンの間に生まれくる赤ん坊に男なら Paul、女なら Paulette と名付けようと二人が語らう場面 (109) にその蓋然性が強調される。しかしながら、「もしよかったらジェファソンの考えていたことをいつか知りたい」 (“But I would like to know his thoughts some time—if you don’t mind” 255) と、黒人同士で<sup>コール・アンド・レスポンス</sup>交わされる呼び掛けと応答に干渉する「<sup>ワイトネス</sup>目撃者」(256) は、作者が意図した人種和睦の未来図に屈折した光を投げ掛けていないだろうか。こうした疑問から、刑執行に立ち会えぬグラントが、「ジェファソンの日記」に書き込まれた福音を語り継ぐ人物として適格かという本質的な問題が浮上する。礼拝堂の教室に戻ると、生徒たちは起立したまま、背筋を伸ばし真っ直ぐ前を向いている。教師は生徒と向き合う場面で声を上げ涙する。<sup>3</sup> もうこの世に教え子がいないことを深く認めながら、「読み書き<sup>そろばん</sup>算数」にとどまらぬ<sup>レッスン</sup>〈教える〉という未知の職域を開拓してゆかねばならない。だとすれば、教師の<sup>レスポンス</sup>嗚咽は、遅まきながら発する声にならぬ最後の<sup>そらばん</sup>応答なのかもしれない。

## 注

1 Harper Lee の *To Kill a Mockingbird* (1960) では、Atticus Finch の懸命な弁護にも拘わらず25歳の黒人被告 Tom Robinson は強姦罪で有罪となる。弁護人は控訴審に一縷の望を残すが、無実の青年は逃走を謀り射殺される。

2 “The Sky Is Gray” (1963) は、白人キリスト教徒の憐憫や施しを毅然と拒む黒人母子を描く。厳しくも慈愛深い母が寒さのあまり上着の襟を立てる8歳の長男にかける “You not a bum . . . You a man” (117) が鮮烈な印象を残す。1972年のインタビューでゲインズは、奴隷時代から男性であることを否定されてきた黒人が、男になろうとするや殺される運命を辿ると発言している (O’Brien 30)。

3 Beavers は、多民族共生の理想と相容れない、都市の荒廃や人種が絡む排斥や暴力などの社会現象を挙げながら、教師が一体誰のためにどういう理由で泣いているのかと批判する (*Wrestling* 229-30)。

## 参考文献

- Auger, Philip. “A Lesson About Manhood: Appropriating ‘The Word’ in Ernest Gaines’s *A Lesson Before Dying*.” *Southern Literary Journal* 27.2 (Spring 1995): 74-85.
- Beavers, Herman. “Prodigal Agency: Allegory and Voice in Ernest J. Gaines’s *A Lesson before* [sic] *Dying*.” *Contemporary Black Men’s Fiction and Drama*. Ed. and Introd. Keith Clark. Urbana: U of Illinois P, 2001. 135-54.
- \_\_\_\_\_. *Wrestling Angels into Song: The Fictions of Ernest J. Gaines and James Alan McPherson*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1995.
- Douglass, Frederick. *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave, Written by Himself*. 1845. Ed. Benjamin Quarles. Cambridge: Harvard UP, 1988.
- Gaines, Ernest J. *The Autobiography of Miss Jane Pittman and Related Readings*. 1998. Evanston: McDougal Littell, 2002.
- \_\_\_\_\_. *A Lesson Before Dying*. 1993. New York: Knopf, 1994.
- \_\_\_\_\_. “The Sky Is Gray.” *Bloodline*. New York: Dial, 1968. 83-117.
- \_\_\_\_\_. “Writing *A Lesson Before Dying*.” *The Southern Review* 41.4 (Autumn 2005): 770-77.
- Jefferson, Thomas. *Notes on the State of Virginia*. 1787. Ed. and Introd. William Peden. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1982.
- Lee, Harper. *To Kill a Mockingbird*. 1960. New York: Harper Collins, 1999.
- Lowe, John. “Transcendence in the House of the Dead: The Subversive Gaze of *A Lesson Before Dying*.” *The World Is Our Culture: Society and Culture in Contemporary Southern Writing*. Ed. and Introd. Jeffrey J. Folks and Nancy Summers Folks. Lexington: UP of Kentucky, 2000. 142-62.
- McKay, Claude. “If We Must Die.” 1919. *The Norton Anthology of African American Literature*. Ed. Henry Louis Gates Jr., Nellie Y. McKay, et al. New York: Norton, 1997. 984.
- Morrison, Toni. *Remember: The Journey to School Integration*. Boston: Houghton Mifflin, 2004.
- O’Brien, John. “Ernest J. Gaines.” 1972. *Conversations with Ernest Gaines*. Ed. John Lowe. Jackson: UP of Mississippi, 1995. 25-38.



Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin; or, Life among the Lowly*. 1852. Introd. Alfred Kazin. New York: Knopf, 1995.

Thompson, Carlyle V. "From a Hog to a Black Man: Black Male Subjectivity and Ritualistic Lynching in Ernest J. Gaines's *A Lesson Before Dying*." *CLA Journal* 45.3 (Mar. 2002): 279-310.

加賀乙彦『宣告』(上下) 東京: 新潮社, 1976年。

\_\_\_\_\_『ある死刑囚との対話』 東京: 弘文堂, 1990年。

トロンブレイ, スティーヴン『死刑産業—アメリカ死刑執行マニュアル』藤田真利子訳, 東京: 作品社, 1997年。